QUADRAL
AURUM TITAN9

スピーカーシステム
¥3,500,000(ペア・税別)

Profile┆ドイツを代表するスピーカーブランドのひとつであるクアドラル。同社のハイエンドラインであるオーラム・シリーズが全ユニットを新設計し、第9世代へと大幅な進化を遂げた。この第9世代の新シリーズは、本誌の166号にてフロア型の中核を担う「RODAN9」と、ブックシェルフ型の「SEDAN 9」をそれぞれ紹介している。そして今回、同シリーズの象徴である最高峰「TITAN」の第9世代モデルが本誌に登場する。1981年の誕生以来のロングセラーフラッグシップが、クアドラル史上最も大きな進化を遂げている。その魅力を小原由夫氏がレポートする。

Specifications

●型式:3ウェイプレッシャーチャンバー型●基本デザイン:バスレフ型●定格入力:500W●ダイナミックパワー:800W●再生周波数帯域:18Hz～65kHz●クロスオーバー周波数:160／3,100Hz●能率(dB/1W/1m):88dB●インピーダンス:4Ω●トゥイーター:quSENSEリボン型●ミッドレンジ:180mm Ø ALTIMA×2●ウーファー:265mm Ø ALTIMA×2●レベルコントロール:ウーファー=±2dB、ミッドレンジ=±2dB、トゥイーター=±2dB●サイズ:320W×510D×1,450Hmm●質量:80.7kg(1本)●取り扱い:ネットワークジャパン(株)

重厚かつ精密な音の振る舞い 新世代ジャーマン・サウンドが完結

Text by
小原由夫
Yoshio Obara
Photo by 田代法生

●本機の位置付けと技術的魅力
新設計のユニットを生かす独自の3ウェイ機構を採用

ドイツのハノーバーを拠点に、世界市場に向けて最新の〝ジャーマン・サウンド〟を提供するクアドラル。この度同社のフラッグシップ・ライン、AURUM（オーラム）シリーズの嚆矢となった81年デビューのTITAN（タイタン）が、第9世代目の「TITAN9」として生まれ変わった。

AURUMシリーズをはじめ、同社のフロア型スピーカーの特色には「プレッシャー・チャンバー・テクノロジー」がある。クアドラル・スピーカーの最大にして独創的なメソッドとなるそれは、ウーファーが前後に動くピストニックモーションの課題を解消するもの。**振動板が前に動く際にはエンクロージャーの内圧の影響を受けるが、後ろに動く際には、内圧の抵抗分によってブレーキがかけられてしまうという。それを防ぐべく、ウーファーの前面に小さな空間を設け、その内圧が振動板の前後の振幅を均等かつスムーズにするという独自の考え方に基づいている。**

これまでのその形状は、鉄格子の奥にユニットが収まっているようなビジュアルだったが、本機ではラバー製と思しきストリングスが縦に張られ、空気がよりスムーズに押し出されるように想像する。

一方、ドライバーはいずれも新規設計。「quSENSE」と命名されたリボン型トゥイーターは、従来型に対してコルゲーションタイプとしたことで表面積が広がり、カットオフ周波数を下げることを実現すると共に、より低歪みに仕上がっている。

このトゥイーターと仮想同軸レイアウトを採った2基のミッドレンジ、そしてウーファーは、95%のアルミニウム、マグネシウム4・5%、チタン0・5%の合金である「ALTIMA」製で、リボントゥイーターとの応答速度のマッチングを意図している。また、ボイスコイルは従来の銅線から、銅コーティングのアルミ線に変更され、線径も1・5倍となって効率と強靭さを兼ね備えることとなった。また、振動板のダストキャップを廃止する一方、アルミダイキャストのフレームを新たに起こしたことで、剛性アップも果たしている。

背面に目を向けると、バイワイヤリング対応のターミナルの近くに3つのトグルスイッチが確認できる。3ウェイの各帯域ごとにアッテネーターを装備しているのだ。それぞれ±2dBの設定が可能。全高は145cmと、やや背が高いスリムなプロポーション。後方に向かって若干スラントしているのは、トゥイーターと耳の高さの位置合わせの狙いもありそうだ。

●音響的魅力を探る
密度の高い濃厚な味わい 量感十分の低域も魅力

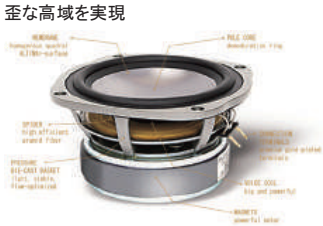
ヴォーカルは実体的でたいそうグラマラスな音像フォルム。温度感が高く、濃いめの質感描写で、中音域から高域にかけて、みっちり密度の詰まった濃密な味わいという印象だ。

他方、ジャズを聴いて感じたのが、膨らみのある低域の量感。ウッドベースの胴鳴りがたっぷりとしており、どっしりとして重々しい。前記の中高域の表現力とも相まって、後方に広がる伴奏陣を従え、ソロがグッと前に迫り出す。

その骨太かつ安定したエネルギーバランスは、編成の大きいクラシックでも奏功し、分厚いハーモニーが立体的なスケール感で展開する。ここではブルックナーの交響曲3番を聴いたが、ジャーマンブランドの面目躍如たる重厚緻密な音の振る舞いには感心させられた。

Details

新開発のリボントゥイーター。従来に比べ、垂直方向を短くし、水平方向の幅を拡大。65kHzまでの超低歪な高域を実現


新開発のウーファー。ダストキャップを無くすことで、繊細さやダイナミックな再現性が大幅に向上。アルミダイキャスト製のバスケットも新設計

本機のリア部。3ウェイの各帯域ごとにアッテネーターを装備し、それぞれ±2dBの設定が可能

内部は各パートを連携させることで、ダイヤフラム前面と、背面の負荷を完全にバランスさせることに成功